



Title	動詞のテ形・連用形に由来する副詞的成分の量的差異
Author(s)	林, 雅子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2006, 40, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5333
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

動詞のテ形・連用形に由来する 副詞的成分の量的差異

林 雅子

1. 目的

動詞テ形と動詞連用形は、文中で中止の機能を担い、中止形とも言われている。その中止形と同じ形をとって文中で副詞的成分として機能するものがある（例えば、動詞テ形では「はたして」「せめて」、動詞連用形では「おりかえし」「くりかえし」など）。本稿では、これらを「動詞のテ形・連用形に由来する副詞的成分」と呼ぶ。これらの中には、品詞論的に動詞のままか副詞になりきっているのか、はっきり分からぬものもある。そのようなものも含めて、文中で副詞として働いているものを、「動詞由来の副詞的成分」として広くとらえて考える。

動詞のテ形と連用形については、その中止の機能における類似点と相違点をめぐって様々な指摘がされているが、それらに由来する副詞的成分については、詳細な調査・研究が行なわれているとはいえない（以下、「動詞のテ形」「動詞の連用形」を単に「テ形」「連用形」と呼ぶ）。これまでのところ、いくつかの語例に限って紹介・検討されることが多く、現代日本語において、副詞的機能をもつテ形・連用形にはどのような種類がどれくらいあるのか、テ形と連用形ではどのような違いがあるのかといった、全般的かつ基本的な検討は行なわれていない。

そのため、大量の言語資料から、テ形・連用形由来の副詞的成分を採取

することがまず必要である。しかしその際、副詞的成分をただ採取してその結果連用形よりテ形が多かったとしても、もともと現代日本語では、単にテ形が優勢なだけなのではないかという可能性を排除できない。そこで、ある一定量の言語資料からすべての中止形を一度採取し、その中から、さらに文中で副詞的機能を担っているものを取り出して、中止形各形の全体数に対してどのくらいの割合をしめるのかについて調べ、テ形・連用形由来の副詞的成分における量的な違いをまず調査することが大切である。

次に、テ形・連用形由来の副詞的成分にはどのようなものがあるのかを意味・機能ごとに分類して、テ形と連用形ではなんらかの差異があるかを考察することが必要である。

以上のように、テ形・連用形に由来する副詞的成分について、主として量的な側面からその差異を調査し考察することを、本稿の目的とする。

2. 先行研究

2.1. テ形・連用形由来の副詞的成分について

これまで、テ形・連用形由来の副詞的成分については、多くの先行研究がとりあげてきた。以下、簡単に紹介する。

まず、動詞の研究、副詞の研究、品詞の転成の研究のなかで、動詞の中止形から副詞への転成現象や中止形に由来する副詞的成分について言及したものに、川端（1958）、鈴木（1972）、宮島（1972）、新川（1974）、成田（1983）、森岡（1984）、工藤（1985）、玉村（1985）、仁田（1995）などがある。このうち、鈴木、新川、玉村氏の論考では、テ形だけでなく、連用形由来の副詞についても触れられている。

また、テ形から副詞への転成について、その仕組みや経路などを詳しく論じたものに、奥田（1989）や高橋（2003）などがある。

さらに、テ形から転成した副詞について、との動詞との違いを含めて、

通時に研究したものに、井出（2003）、井上（1986）、大槻（2003）、山田（1990）、坂詰（2000）などがある。

以上の先行研究では、それぞれに有益な指摘がなされているが、他の研究領域の中で付隨的にとりあげているものや、概説的なものが多く、現代日本語のテ形・連用形由来の副詞的成分について、多くの用例に基づきながら全般的に論じているものはない。また、現代日本語における中止形から副詞への転成を論じたものでも、それらの多くはテ形のみをとりあげており、連用形からの転成をとりあげたものでも、語例の紹介にとどまって、テ形と連用形との違いについて述べたものはない。

以上のことから、本稿では、現代日本語で使用されているテ形・連用形由来の副詞的成分を大量の言語資料から採取し、テ形由来と連用形由来とでは量的にどのような違いがあるのかを調査する。

2.2. 副詞の範囲について

何をもって副詞と考えるか、また副詞の範囲をどう規定するかは、非常に難しい問題である。それを決めなければ副詞的成分の研究が出来ないというのであれば、研究は進まない。本稿は、副詞の定義や規定を目指すものではなく、先行研究で「副詞」と言われているものを、「副詞的成分」として広く取り上げることとする。

副詞の範囲や定義は研究者によって様々である。主な文法論の範囲でも、副詞を最も広く考えると、感動詞や接続詞から形容詞連用形・形容動詞連用形まで入ることになる。事実、動詞を限定修飾する「ゆっくり」が（情態）副詞なのであれば、「早く」などの形容詞連用形や、「早急に」などの形容動詞連用形も副詞と考えてもいいという議論も成り立つ。この論理で形容詞連用形を副詞と考えるのであれば、動詞を限定修飾する動詞テ形（例えば「急いで」など）も同様に副詞と考えてもよいことになる。実際

に「急いで」を副詞と認めている先行研究もある（鈴木（1972）など）。

このように、いわゆる情態副詞に相当する語群は、先行研究で最も意見が分かれるところである。そこで、情態副詞をめぐる諸問題について詳しく書かれている『国語学大辞典』の「情態副詞」の項目を以下に引用する。（項目「副詞」の中の説明より。項目執筆担当、工藤浩氏。傍点・下線は執筆者に、波線は本稿筆者によるものである。）

【情態副詞】動作作用または事態のあり方を表わして、主として動詞を修飾する副詞。（中略）動作などのあり方を表わし動詞を修飾するという機能は、この副詞のほか、形容詞・形容動詞の連用形によっても果たされることは前述したとおり。情態副詞の命名者山田孝雄は、形容動詞の語幹「静か・堂々」などをも情態副詞と扱ったが、吉沢義則・橋本進吉らによって、文語でナリ・タリ、口語でダの語尾をとつて活用する「静かなり・堂々たり／静かだ」などは形容動詞という品詞として立てうると提唱され、現在での通説となっている。（文語のタリ活用は口語ではすたれたため、口語では「堂々と」を副詞、「堂々たる」を連体詞として扱うことが多い。二活用形に限られた不完全形容動詞とする説もある）。こうして現在いわゆる情態副詞（山田説と区別して状態副詞とも）は、形容動詞と意味機能に一定の共通性をもちながらも、活用しえない点で、いわば取り残された語群である。擬声擬態語や疊語という特殊な構成をした語が多いこと、また語尾にト・ニをとるものが多いことは、こうした事情による。とともに、特殊的形象的な意味をもつ狭義の擬声擬態語から、より一般的な意味を獲得しつつ「かなりはっきり」「ずいぶんのんびりと」など、他の副詞一般と異なり修飾語を受けうるようになったものや、更に「ぴったり（と）合う・ぴったりな（の）服・ぴったりだ」のように、不整合な

がら活用を半ばもつに至るもののが存在し、両者の間は連続的につながっている。そのため、両者の共通性を優先させて、これら情態副詞を形容動詞とともに、用言または体言の一種と考える説もある（松下大三郎「象形動詞」金田一京助「準名詞」、渡辺実「情態詞」など）。逆に、副詞法の形容詞・形容動詞の連用形を副詞（に転成したもの）と見なす説も古くからある（最近では鈴木重幸）。また意味の面では、その名の如く質的ないし量的な状態を表わすものが多数を占めるが、そのほか、「かつて・あらかじめ・しばらく」など時に關するもの、「わざと・あえて・ことさら（に）」など意志態度的なもの、「直接・ともに・互いに」など關係的なものなども、通常この副詞に入れられて、まとめりはよくない。とりわけ時に關するものは、動詞に限らず「いつもやさしい」「かつてここは都だった」など形容詞・名詞述語と共存するものがあり、また述語のテンス・アスペクトと呼応關係をもつところから、時の副詞として別扱いする考え方もある（川端善明）。その他も一口に動詞を修飾するとはいっても、動詞のどの側面とかかわるかとか、どんな種類の動詞と結びつくかなど、動詞の細分の問題と並行して、今後さらに整理・細分される余地を残しているように思われる。

以上の記述からも分かるように、いわゆる情態副詞は、それを副詞として認めるか否か、先行研究によって大きく分かれている。よって、本稿では副詞の範囲規定を先に定めてしまうのではなく、先行研究において「副詞」と指摘されているものを、広く「副詞的成分」として取り上げることとする。接続詞についても、接続副詞とする説に従い（山田（1936））、本稿の対象とした。

3. 資料

文章のタイプが偏らないようにするために、「新聞（地の文）」「文学作品」「論述文（地の文）」を資料として調査した。「文学作品」「論述文」については、個人差がでないように1作者につき1作品とした。

1) 「新聞（地の文）」

『CD——毎日新聞'98年版』朝刊社会面——全国版新聞記事

2) 「文学作品」

椎名誠『新橋烏森口青春篇』、村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、赤川次郎『女社長に乾杯！』、沢木耕太郎『一瞬の夏』、曾野綾子『太郎物語 高校編・大学編』、井上ひさし『ブンとフン』、渡辺淳一『花埋み』、新田次郎『孤高の人』、石川達三『青春の蹉跌』、三浦綾子『塩狩峠』、安部公房『砂の女』、三浦哲郎『忍ぶ川』、井上靖『あすなろ物語』、松本清張『点と線』、大岡昇平『野火』（以上、『新潮文庫の100冊』）

3) 「論述文（地の文）」

中根千枝『タテ社会の人間関係』、会田雄次『日本人の意識構造』、今津晃『二十世紀の世界』、織田武雄『地図の歴史——日本篇』、河野友美『たべものと日本人』、金田一春彦『日本人の言語表現』、高尾一彦『近世の日本』、飛鳥井雅道『近代の潮流』、吉田寿三郎『高齢化社会』、井上忠司『まなざしの人間関係』、黒井千次『働くということ』、飯田経夫『「ゆとり」とは何か』、吉野裕子『日本人の死生観』、山田雄一『稟議と根回し』、吉岡郁夫『人体の不思議』（以上、CASTEL/Jのデータを使用した）

4. 考察対象の選定基準

4.1. テ形・連用形の採取基準

テ形と連用形を採取する際、以下のものは調査対象から外し、それ以外のものはすべて採取した。

- 1) 否定の中止形（～ないで、～なくて、～せず、など）
- 2) 補助動詞、複合語、他の接続表現の前項となる場合
(～している、～しはじめる、～してから、～しながら、など)
- 3) 助詞を下接する場合（～しての、～しては、～しても、など）
- 4) テ形・連用形以下が省略されているもの
- 5) 連用形からの転成名詞（ながれ、うごき、など）

4.2. 副詞的成分の採取基準

単独で副詞としての機能をもつものを採取した。その際、以下のものは対象から外した。

- 1) 修飾とも継起的動作連続とも両様に解釈できるもの。また、文末が「～している」の形式のために、修飾の解釈になるもの。
- 2) 後続の動詞との組み合わせにより、副詞的機能を担うもの。
～してまわる、～して帰る、～して歩く、～して暮らす、～して生きる、
～して過ごす、など
- 3) 格が省略されて一語化しているように見えるもの。
なみだながして、脚ふんばって、勢いあまって、所変わって、汗水たら
して、音立てて、腰かけて、腕組して、など
- 4) 格を伴わなくても、前に何らかの要素があることで副詞的機能を担っ
ているもの。
23日つづけて、など（「つづけて」単独で出現しているものは対象に

含める。)

5. テ形・連用形における副詞的成分の量的な差異

調査の結果、中止形全体では、テ形が約4万例、連用形が約2万例得られ、そこからさらに、単独で副詞的機能を持つ語を取り出した結果、テ形由来の副詞的成分は4323例、連用形由来の副詞的成分は508例であった。中止形全体では、テ形は連用形の約2倍に過ぎないのに、副詞的機能をもつテ形は、連用形の8.6倍であり、テ形由来の方が非常に多いことが分かる。

ただし、「～として」「～にして」「～もって」など、以下の(1)～(4)のような形式は、辞書で副詞と認定されているものもあるが、特殊な形であるため単独形式と考えない立場もある。これらを先の用例数から取り除いて集計してみると、テ形由来の副詞的成分は3766例で、副詞的機能をもつテ形は、連用形の7.5倍となり、上のように対象を限定しても、テ形の方が非常に多いことが分かる。

- 1) 「～として」の形をとるもの (時として、主として、など)
- 2) 「～にして」の形をとるもの (往々にして、一瞬にして、など)
- 3) 「～もって」の形をとるもの (前もって、今もって、など)
- 4) 「指示詞+動詞」の中止形のもの (こうして、こうやって、など)

また、「漢語+して」や「副詞+して」など、以下の(5)や(6)のような形式を、一単語ではなく二単語と見なす立場もある。さらに、(7)や(8)のように、現代日本語の動詞との関連を見出しにくいものもある。そこで、これらを除いた場合でも同様の結果が得られるかどうかも検討した((1)～(8)は分類の困難なものが多いため、6節で述べる分類の対象からも外した)。

- 5) 「漢語+して」の形をとるもの (苦労して、協力して、など)

- 6) 「副詞+して」の形をとるもの (にこにこして、しばらくして、など)
- 7) 複合的なもの (えてして、かててくわえて、など)
- 8) 現代日本語に終止形がないもの (すべて、あえて、など)

その結果、テ形由来の副詞的成分の延べ語数は2641例で、テ形は連用形の5.3倍となり、依然として、テ形の方が非常に多いことが分かる。また、異なり語数で見てみると、テ形由来の副詞的成分は136語、連用形由来の副詞的成分は15語で、テ形は連用形の9.1倍であり、テ形の方が副詞の種類も豊富であることが分かる。このように、調査対象をいくつかに限定し、中止形全体の両形の比率と比べても、中止形由来の副詞的成分では、連用形に比べてテ形の方が圧倒的に多いことが明らかとなった。

6. 副詞的成分におけるテ形・連用形の意味・機能的な差異

調査の結果得られた語をそれぞれ意味・機能ごとに分類して、以下に用例数とともに示す。

6.1. テ形由来の副詞的成分について

1. 事態全体に対する言表主体の捉え方を表わすもの (いわゆる陳述・誘導・注釈などを表わす副詞的成分)

おしなべて, 2、かえって, 106、きまって, 38、せめて, 45、たえて,

2、とりたてて, 11、とりわけて, 2、はたして, 92、めだって, 3

2. 後続の形容詞の表わす程度をより詳しくするもの (程度に関わる副詞的成分)

いたって, 13、きわだって, 6、きわめて, 94、すぐれて, 6、ずばぬけて, 3、とびぬけて, 3、ぬきんでて, 1

3. 文や事態の間をつなぐもの (接続に関わる副詞的成分)

かわって, 10、くわえて, 5、したがって, 47、ついで, 49、ひるが

えって, 6、まして, 23

4. 状況を表わすもの (状況に関わる副詞的成分)

4.1. 場面の展開を表わすもの

あけて, 2、こえて, 1

4.2. 数量を引き出すもの

あわせて, 14、しめて, 1

5. 後続の動詞の表わす動きをより詳しくするもの (いわゆる情態副詞に相当する成分)

5.1. 時に関するもの (工藤 (1980) 参照)

あいついで, 49、あらためて, 207、いそいで, 113、おって, 1、かねて, 8、くりかえして, 10、さしあたって, 8、つづいて, 47、つづけて, 24、はじめて, 390、ひきつづいて, 4

5.2. 意志態度的なもの (工藤 (1980) 参照) や集合、協力、競争などを表わすもの

あげて, 3、あつまって, 22、あやまって, 26、あらそって, 2、おもいきって, 33、きそって, 4、くんで, 1、こぞって, 4、このんで, 13、しいて, 26、すきこのんで, 8、すすんで, 32、そろえて, 1、そろって, 26、つとめて, 20、ふざけて, 5、まげて, 1、まちがえて, 1、まちがって, 5、まとめて, 8、もとめて, 2

5.3. 話し方・考え方のあり方を表わすもの

うちとけて, 2、うらがえして, 3、かいつまんで, 3、きりはなして, 2、たちいって, 2、たとえて, 4、つっこんで, 1、つっぱなして, 1、わけて, 1

5.4. 配列や位置を表わすもの

うちつれて, 1、かたまって, 1、くっついて, 3、つれだって, 9、とりかこんで, 1、ならんで, 44、はなれて, 9、まとまって, 4、むか

いあって, 11、むきあって, 1、むらがって, 1

5.5. 主体の心理状態を表わすもの

あきらめて, 27、あせって, 1、あまんじて, 1、あらたまって, 13、
 あわてて, 180、いきおいこんで, 5、いさんで, 1、いとおしんで, 1、
 いばって, 2、うなだれて, 2、おちついて, 10、おどけて, 3、おび
 えて, 1、おもしろがって, 1、かしこまって, 6、がんばって, 2、き
 おって, 2、きどって, 2、たけりたって, 1、たのしんで, 3、つつし
 んで, 5、とまどって, 1、ねらって, 1、のぞんで, 1、ふりしぶって,
 1、みちたりて, 1、やすんじて, 1、よろこびいさんで, 2、よろこ
 んで, 42

5.6. 主体の様子を表わすもの

いきて, 11、うなって, 1、おしだまって, 1、かくれて, 1、かさな
 って, 14、くるって, 1、すまして, 4、すわって, 5、せきこんで, 4、
 だまって, 337、だまりこくって, 3、ぢぢこまって, 1、つられて, 2、
 とびあがって, 4、とんで, 9、ないて, 4、なみだぐんで, 1、のけぞ
 って, 1、はいざって, 1、はしって, 7、はしゃいで, 1、はって, 1、
 はりきって, 2、ひらきなおって, 1、ふてくされて, 1、ほほえんで,
 11、まじめくさって, 5、みがまえて, 1、わらって, 94

テ形由来の副詞的成分は、分類「1. ~ 5.」に渡って広く存在する。特
 に「5. 後続の動詞の表わす動きをより詳しくするもの」が多く、なかで
 も「主体の心理状態を表わすもの」「主体の様子を表わすもの」などのい
 わゆる「付帯状態」を表わすものが非常に多く存在するのが特徴的である。
 そして、副詞形と同じ形の名詞が存在しないことも、連用形由来の副詞的
 成分と異なる点である。

6.2. 連用形由來の副詞的成分について

1. 事態全体に対する言表主体の捉え方を表わすもの
あまり, 7、たとえ, 29
2. 後続の形容詞の表わす程度をより詳しくするもの
なし
3. 文や事態の間をつなぐもの
つまり, 121、および, 158、とりわけ, 55
4. 状況を表わすもの
なし
5. 後続の動詞の表わす動きをより詳しくするもの
 - 5.1. 時に関するもの (工藤 (1980) 参照)
あいつぎ, 2、いそぎ, 3、おりかえし, 6、くりかえし, 47、ひきづき, 16、とりいそぎ, 1、はじめ, 9、うまれつき, 7、さしあたり, 12
 - 5.2. 意志態度的なもの (工藤 (1980) 参照) や集合、協力、競争などを表わすもの
おもいきり, 30
 - 5.3. 話し方・考え方のあり方を表わすもの
なし
 - 5.4. 配列や位置を表わすもの
なし
 - 5.5. 主体の心理状態を表わすもの
なし
 - 5.6. 主体の様子を表わすもの
なし

以上の分類結果をテ形の場合と比較すると、まず分類「2.」「4.」がないことが特徴的である。また、分類「1.」「3.」も量が少ない。さらに、いわゆる情態副詞に相当する分類「5.」の場合でも、テ形に多く出現した「付帯状態」に相当するものではなく、「時に関するもの」「意志態度的なもの」のみであることが分かる。

そして、連用形由来の副詞的成分は、それと同じ形の名詞をもつものが多い。その上、名詞的用法の方が副詞的用法に先行する場合もある。その観点を中心に分類を試みると、以下のようになる。(どちらが先行するかの判断は、「日本国語大辞典第二版」に掲載されている用例の、初出の年代に従った。)

A. 連用形名詞が先のもの

あまり、いそぎ、うまれつき、つまり、はじめ

B. 漢文訓読の影響を受けた可能性があるもの

たとえ (久山善正 (1959) 参照)、および (山田 (1935) 参照)

C. 連用形名詞と連用形副詞のどちらが先か分からぬもの

おもいきり、おりかえし、くりかえし

D. 連用形名詞のほうが後のもの

ひきつづき

E. 名詞的用法がないもの

とりいそぎ、あいつぎ、さしあたり、とりわけ

Aの副詞的用法より名詞的用法が先行するものや、Bの「たとえ」「および」のように漢文訓読の影響を受けた可能性があるものを外して考えると、C・D・Eのすべてが、先の分類の「5.」になり、分類「1. 2. 3. 4.」の機能をもつ連用形の副詞的成分はない、ということになる。

また、分類「5.」に属するものでも、意味・機能がテ形よりも限定さ

れているという特徴がある。テ形の場合は、主体の状態や様態を表わして、「付帯状態」などの状態的限定修飾成分となるものが非常に多かったのに対して、連用形の副詞的成分は、「時に関するもの」(おりかえし、くりかえし、ひきつづき、とりいそぎ、あいつぎ、さしあたり、など)「意志態度的なもの」(おもいきり)などが多くを占めており、「付帯状態」に相当するものが見られない。そしてそれらは、「付帯状態」を表わす状態的限定修飾成分よりも共起制限もゆるく、より副詞的度合いが高いのが特徴である。また、先に引用した工藤(1980)の指摘のように、「時に関するもの」は、いわゆる「情態副詞」とは別扱いして考える立場もある。

7. まとめと今後の課題

以上、本稿における調査・検討の結果、動詞のテ形と連用形は中止の機能を共通にもつものの、テ形・連用形由来の副詞的成分については、全体の語数においても、また、意味・機能上の分類においても、量的に大きく異なっていることが明らかとなった。

では、なぜこのような違いがテ形由来と連用形由来との間に見られるのだろうか。動詞のテ形・連用形の差異は文章・文体的差異であるとする論考もあるが、もし、両者の違いが文体的差異のみであるとすると、テ形・連用形由来の副詞的成分における量的な差異の説明がつかない。これについて林(2004a)では、テ形・連用形の間には文章・文体的差異があることを認めつつも、両形の間には、特に書き言葉で、意味・機能的な差異が強く働いていることを調査によって確認した。後続の動詞に従属的で、状況成分や状態修飾成分など後続事態を詳しく説明する副詞的機能を担うものは、書き言葉でさえも、テ形が連用形に比べて圧倒的に多く選択されていることが確認された。このような中止形におけるテ形・連用形の機能的な差異が、テ形・連用形由来の副詞的成分の成立における差異に関与して

いるのではないかと考えられる。

本稿では文中で副詞的機能を担っているものすべてを調査・考察の対象としたが、それを品詞としての副詞と認めていいかどうかはさらに検討を加えなければならない。一つ一つの語が、副詞的度合いにおいてそれぞれ差異があり、それらをきちんと調査する必要がある。

また、本稿で行なった意味・機能的な分類は暫定的なものであり、複数の分類にまたがるものや中間的なものなども含まれているので、さらなる精密化が必要である。さらに、工藤（1980）でも述べられているように、「情態副詞の整理・細分」も必要な課題だと考えている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、石井正彦先生よりきめ細やかなご指導を賜わりました。「謝辞」を述べることを先生が望んでいらっしゃらないことは存じ上げておりますが、ここに記して感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。なお、不備や誤りなどはすべて筆者の責に帰せられるものであります。

文献

井出至（2003）「「せめて」について」『国語副詞の史的研究』増補版 pp. 91-126（初出 井出至（1955）「国語副詞の史的研究(1)「せめて」について」『人文研究』六ノ五）

井上博嗣（1986）「古代語における比較表現——副詞「まして」の場合——」『女子大国文』100 pp. 121-139

大槻美智子（2003）「「しひて」」『国語副詞の史的研究』増補版 pp. 243-281（初出 桜井美智子（1981）「国語副詞の史的研究——「しひて」」『文学史研究』22）

奥田靖雄（1989）「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」『ことばの科学』2 pp. 11-47

川端善明（1958）「接続と修飾——「連用」についての序説——」『国語国文』27-5 pp. 296-322

工藤浩（1980）「副詞」の項目『国語学大辞典』 pp. 744-745

工藤浩（1985）「〈日本語文法五つの焦点〉副詞」『言語生活』406 pp. 30-31

久山善正 (1959) 「「タトイ」(仮使・仮令)についての一考察」『訓点語と訓点資料』11 pp. 41-58

坂詰力治 (2000) 「動詞に助詞「て」を付して転成した副詞——「わきて(分)」と「わけて(分)」を中心に——」『桜文論叢』51 pp. 220-234

鈴木重幸 (1972) 「第15章 副詞」『日本語文法・形態論』 pp. 461-478

高橋太郎 (2003) 「第9章 動詞が動詞らしさをうしなうとき」『動詞九章』 pp. 259-266 (初出 高橋太郎 (1983) 「構造と機能と意味——動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって」『日本語学』2卷12号)

玉村文郎 (1985) 「7. 語の構成と造語法」『語彙の研究と教育(下)』日本語教育指導参考書13国立国語研究所 pp. 60-78

成田徹男 (1983) 「動詞の「て」形の副詞的用法——「様態動詞」を中心に——」『副用語の研究』渡辺実編 pp. 137-158

新川忠 (1974) 「〈言語学の用語〉副詞」『教育国語』38 pp. 124-125

仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究』上 pp. 87-126

林雅子 (2004a) 「動詞ヲ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——新聞・小説における「なる」の用法を中心に——」『計量国語学』24卷7号 pp. 325-349

林雅子 (2004b) 「情態副詞をめぐって」『龍谷大学国際センター研究年報』第13号 pp. 3-14

宮島達夫 (1972) 「第3部1. 動詞の意味と文法的性質」『動詞の意味・用法の記述的研究』 pp. 675-679

森岡健二 (1984) 「副用語の単位としての位置」『上智大学国文学論集』17 pp. 5-20

山田孝雄 (1935) 「および ならびに」『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』 pp. 237-241 (復刻版)

山田みどり (1990) 「用法の違いと意味の差と——「あやまりて」を例として——」『同朋国文』22 pp. 1-23

山田孝雄 (1936) 「第16章 副詞」『日本文法学概論』 pp. 367-394
(大学院博士後期課程)

SUMMARY

Quantitative Study on Adverbial Usage of *te*-forms and Infinitive Forms of Verbs

Masako HAYASHI

In this research, I made a quantitative study to determine whether the differences between *te*-forms and infinitive forms (*ren'yoo* forms) of verbs have any effect on the adverbial usage of verbs.

As a result, it became clear that:

- 1) The adverbial usage of the two forms has a quantitative difference between *te*-forms and infinitive forms (*ren'yoo* forms) of verbs.
- 2) The adverbial usage of the two forms has a qualitative difference between *te*-forms and infinitive forms (*ren'yoo* forms) of verbs.

These results lead to the conclusion that quantitative study is required in order to identify the differences of adverbial usages between *te*-forms and infinitive forms of verbs.

キーワード : *te*-forms of verbs; infinitive forms (*ren'yoo* forms) of verbs;
grammatically synonymous expressions;
adverbs; adverbial usage of verbs